



今年度の保健だよりは、さまざまな美術作品を通し、健康に関する情報を発信してまいります。美術遺産を美術史や美術批評とは異なる立場で、人間の生命力や生きた証として新しいまなざしで見直す試みです。思わぬ見当違いや思い込みに過ぎるところが多々あるかもしれません。あらかじめお断りして、お許しをいただきたいと思います。最初は、麗しの阿修羅像です。

■■■生と魂の美術館■■■

■ 興福寺「阿修羅」 切ないまなざしとしなやかな肢体 ■



奈良 興福寺の国宝「阿修羅（あしゅら）」は、3つの顔と6つの腕を持つ三面六臂（さんめんろっぴ）の仏像で、天平彫刻の傑作とされています。3つの顔は、微妙に表情が違って、それぞれの目鼻立ちのバランスから、右側は幼少期の顔、左側は思春期の顔、正面は青年期の顔とされています。

幼少期の表情はどこかあどけなさが残り、下唇をかみしめた表情が愛らしくもあります。眉をひそめた思春期の顔は、何か思うところがあるのでしょうか、心の中を逡巡しているような雰囲気です。青年期は眉間に力を入れ、まっすぐ前を見据え、迷いを断ち凛とした決意にみなぎるかのようです。凛々しくも憂いを帯び、ふくよかな頬は若々しく、きゅっと引き締めた唇は多くを語らない意志の強さを感じさせます。

身長は 154.3 cm、ほっそりとした身体にすらりと伸びる腕、8 頭身のプロポーションです。



右側：幼少期



左側：思春期



正面：青年期

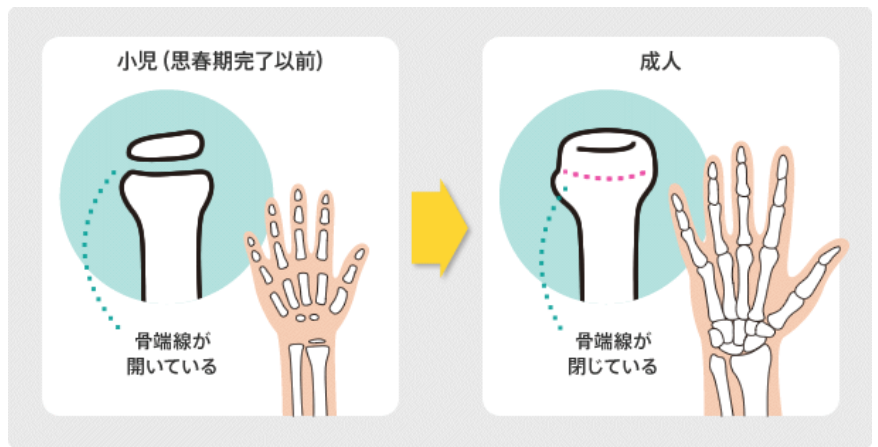
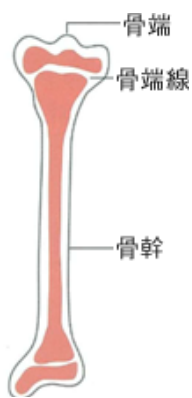
阿修羅像は、この全体的なイメージから、『憂いを帯びた美少年』と形容されます。これは、顔立ちと腕の絶妙なバランスとスタイルが、子どもから大人になる過程を想起させるからかもしれません。身体が大きくなっていく骨格の成長と体格の確立の過程が阿修羅像にみてとれます。

■ 骨の成長と骨端線の閉鎖 ■

骨は「縦＝長さ」と「横＝太さ」の2方向に成長し、おもに縦方向への成長が身長を伸ばします。骨の骨端線にある軟骨細胞が増えて、骨に置き換わっていくことにより骨が伸びるしくみになっています。

腕や足の骨の大部分を形成している細長い骨を長骨といいます。これをレントゲン写真で見ると、骨の中央部にあたる骨幹とその両端の先にある骨端と呼ばれる部分に分かれます。骨幹と骨端の間に見える部分が軟骨で、レントゲンには白く写らず、これを骨端線といいます。男子は17歳以上、女子は15歳以上になると、骨端線が閉鎖し、成熟した大人の骨になり身長の伸びが止まります。

大まかですが、骨が成長する順番は、①手足の骨 ②脛・太もも・上腕骨・前腕の骨 ③胴体（背骨）とされています。小学校高学年から中学生、高校生前半は、スポーツがかかって身長が伸び、上肢や下肢は体幹より先んじて伸びるので、この頃は、子ども服を着ても大人の服を着ても、何かしっくりこないし、今一つ似合わないといった体験を多くの方がするものです。まさに、美しい阿修羅のようなプロポーションだからです。



■ 堀辰雄 『大和路』より ■

作家の堀辰雄（1904～1953）は、はじめて奈良を訪ね、阿修羅に出会ったときの感動を記しています。阿修羅の「切ない目ざし」は、いったい何を意味しているのでしょうか。

結局が一番長いこと、ちょうど若い樹木が枝を拡げるような自然さで、六本の腕を一ぱいに拡げながら、何処か遥かなところを、何かをこらえているような表情で、一心になって見入っている阿修羅王の前に立ち止まっていた。なんとというういしい、しかも切ない目ざしだろう。かういう目ざしをして、何を見つめよとわれわれに示しているのだろう。それが何かわれわれ人間の奥ぶかくにあるもので、その一心な目ざしに自分を集中させていると、自分のうちにおのずから故しれぬ郷愁のようなものが生まれてくる、— 何かそういったノスタルジックなものさえ身におぼえ出しながら、僕はだんだん切ない気持ちになって、やっとのことで、その彫像をうしろにした。 「十月」

阿修羅は、もともと六道という悩み悲しみ苦しみの世界に住んでいる鬼神だそうです。だからこそ、弱い私たちの傍らにいて、ひたすら悲しみを悲しみ、苦しみを苦しんでくれるので、こんなにも切ないまなざしをしているのでしょうか。そして、ひたすら両手を挙げて支え、両手を広げて抱え、両手を合わせて祈ってくれているのでしょうか。